

平成 27 年 6 月 8 日現在

機関番号：14701

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24531202

研究課題名（和文）手作り百人一首「セレクト20」を使った小学校国語科の授業開発

研究課題名（英文）A Practical Study of Using Hand-made Hyakunin-issshu Playing Cards called Select20 in Class

研究代表者

菊川 恵三（KIKUKAWA, keizo）

和歌山大学・教育学部・教授

研究者番号：00204826

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は本研究室で考案した手作り百人一首カルタ「セレクト20」を活用し、複数の小学校での授業を通じて実験した結果、このカルタ作りとカルタ遊びは多くの児童から喜ばれることが確かめられた。また、色紙作り・地域学習、さらには和歌の朗詠と七五調の韻文（いろは歌）などの学習へと発展することができる。これを活かせば、現在行われている入門期の古典学習とは異なる有意義なアプローチが可能になる。

研究成果の概要（英文）：This research was conducted at some elementary schools to evaluate the effectiveness of using the original hand-made playing cards called “Select 20” in class. The result shows that most school children take great pleasure in making cards and playing games with them. Using “Select 20” can lead to a new effective teaching of Japanese classics. In addition, “Select 20” can be used for various other purposes, such as making colored paper, learning their regional culture and history, reciting and learning traditional Japanese poems.

研究分野：教科教育学

キーワード：百人一首 カルタ セレクト20 和歌朗詠 色紙作り 古典入門

## 1. 研究開始当初の背景

平成 20 年に新しい「小学校学習指導要領・国語」が示され、そこでは「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が特立された。これは、近年すすむグローバル化の中であって、我が国の伝統的な言語文化を通して感性や情緒を育むことで、他国の文化理解へとつなぐためであり、その方法として音読・暗唱の重視すべきことが示された。

小学校低学年に「昔話や神話・伝承などの…読み聞かせ」、中学年に「易しい文語調の短歌や俳句…音読や暗唱」、高学年に「親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章…音読」との具体的な内容が示された。

これを受けて教科書の改訂がなされたが、それをどのように実際の授業に反映していくのかは、手探り状態というのが現状である。たとえば、音読・暗唱といっても、そのまま児童に押し付けたのでは、長続きはしないだろう。つまり、指導要領の精神を活かす教材と授業開発が喫緊の課題なのである。

## 2. 研究の目的

このような中で我々は新しい教材として「手作り百人一首『セレクト 20』」(以下、「セレクト 20」)を考案し、国語科教育法の授業の中で、あるいは附属学校を利用した実験授業を通して、その有効性を検証してきた。

これは、東京教育技術研究所が開発した五色百人一首」にヒントを得た百人一首カルタである。20 首と少なく、ゲーム性が高いため子供たちは対戦に夢中になる。ただし、この「五色百人一首」にはいくつかの問題がある。その一つがゲーム性の高さに依存するあまり、しばしば集中力の養成やクラス作りに重点がおかれ、実際の国語の授業との関連が弱いことである。

これを克服するために我々が独自に考案したのが、「セレクト 20」である。その最大の特徴は、手作りなので安価なうえ、マイ・カルタになるので大切に、何より自由に歌を選ぶことができる(教科書採録の名歌を集めることも可能)ことである。

この「セレクト 20」が果たして、学校現場

に受け入れられるのか。そのために改善すべき点はどこになるのか。本研究は、このような課題のもとにおこなわれた。

その際留意したのは、教材として実際の学校現場での活用を目指す以上、大学内の模倣的実験ではなく、実際の教育現場にでて確かめることだった。またカルタから始まって、そこから国語の授業にどう発展的させていくのか(深化)。総合の時間や他教科との合科へと意識的に展開していくこと(拡大)である。

## 3. 研究の方法

(1) 研究の方法として採用したのは、実際の小学校で実験授業をおこない、その経験の中から本教材の可能性を検証することである。

その際、申請者はこの研究が始まる平成 24 年度から 2 年間、和歌山大学附属小学校長を兼務する僥倖を活かそうと考えた。大学と附属小学校は車で約 30 分と離れているので、普段はなかなか訪問できないが、校長職に就くことで附属小学校と深く関わる立場になった。この機会を利用して、まずは附属小学校を舞台に、新教材の有益性を検証しようとした。国立大学附属学校としても、その与えられた使命として、大学研究者の実践研究の場となることが重要である。

ただし、附属小学校が特別な小学校で、公立小学校とは違うと考える先生も少なくない。そこで附属小だけでなく、市内の小学校にも協力を求めた。また、小中連携を踏まえ、発展的に国語科授業の改善につなげるため、中学校現場でも授業実践の協力を行った。幸い、本学大学院で現職教員として修士課程を終えた先生の協力をえて実施することができた。

## 4. 研究成果

(1) この研究の方法で明示したように、実際の研究授業について、実施状況をまとめておこう。

附属小学校については、初年度(24 年度)から 3 か年連続して実施してきた。

初年度：3 年生 3 クラスと 5 年生 2 クラス

2 年度：3 年生 3 クラス

3 年度：3 年生 3 クラス、4 年生 3 クラス  
このように、毎年 3 年生全クラス（3 学級）  
において研究授業をおこなうことができた。  
3 年生になったのは、この学年の教科書に百  
人一首が掲載されていること（指導要領に示  
されている）と関係する。

公立小学校では、和歌山市立雑賀小学校  
と藤戸台小学校と離れた紀の川市立田中小  
学校で実施した。

初年度：雑賀小学校 5 年 4 クラス

2 年度：藤戸台小学校 4 年生 3 クラス

3 年度：藤戸台小学校 3 年生 4 クラス

公立中学としては有田川町立石垣中学  
を対象に 2 年度と 3 年度に実施した。

2 年、3 年度：石垣中学 1～3 年 3 クラス

以上のように、研究期間中に授業をおこなっ  
たのは小学校で延べ 24 クラス受講生徒数は  
約 600 名。中学では 6 クラス延べ 6 クラス  
120 名に授業をおこなった。

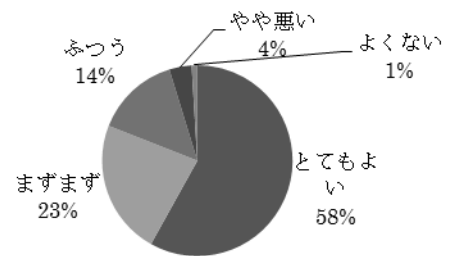
この研究授業を通して、明らかになってき  
たことをまとめると次のようになる。

- ・百人一首カルタは小学生でも容易に始める  
ことができ、熱中するただし、小学生は勝  
負にこだわるあまり、実施するのに注意が  
いる。
- ・百人一首カルタの経験がない教員が多く、  
今回の経験を通してやってみようという  
意欲を持つことができた。
- ・カルタで慣れたあとの学習活動は、教員の  
アイデアと意識のもちようで、さまざまな  
可能性がある。

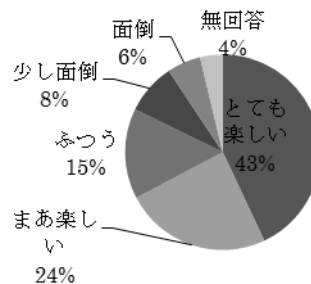
（２）次にこの経験から小学校と中学校の  
違いに焦点をあてながら論じた「手作り百人  
一首カルタ「セレクト 20」の実践研究 ふじ  
と台小学校・石垣中学の実験授業から」に  
まとめたものを紹介する。

我々が考案した「セレクト 20」について、  
カルタ遊びは楽しかったか、カルタ作りは楽  
しかったかを尋ねたところ、次のような割合  
になった。

2. 今回やった百人一首カルタは楽しかった  
ですか。(5段階)



【4】セレクト20を作るのは楽しかったで  
すか。



「カルタ遊び」は大部分の児童が、「カル  
タ作り」についても半数以上が肯定的にと  
らえている。これは小学生のものだが、中  
学生の場合もほぼ同じである。しかし、「少  
し面倒」「面倒」が増えることを思えば、千  
代紙を選ぶ楽しさや工作の楽しさはしだい  
に女子生徒特有のものになっていく傾向が  
うかがえる。

カルタからの発展的学習として、色紙作  
りを実践した。これはカルタの中から一首え  
らび、それを白紙に書いて台紙に貼り付け色  
紙で飾るものである。（下に藤戸台小学校 3 年  
生の作品を掲げた）



これは国語科から図画工作との合科を考  
えたもので、このような作業を通してカルタ  
から自分の選んだ歌にあったデザインへと  
進化させることになる。同じことを中学生に  
も試みた。大きな違いは、小学生の場合は歌

に出てくる言葉「富士・花・月・雪」などを具体化が多いのに対し、歌全体の意味を自分なりに想像し、その歌のイメージに合わせて飾り紙の色を選び、これらを自分なりにデザインして貼りつけていく

このことは単に色紙のデザインだけでない。好きな歌を尋ねると、小学生は富士のように見知った言葉を中心に選び、中学生はつれない恋のように、歌の内容にひかれる。両者のデザインの違いは、この意識の違いにあったことがわかるのである。

以上、論文の一部を紹介したが、それ以外にもさまざまな発展的学習が可能であることが分かった。それは次のようなものである。

- ・地元和歌山市を歌った山部赤人「和歌の浦に」を学んだあと、和歌浦や万葉館の見学と合わせることで、地域学習の一助とする。
- ・百人一首は少し難しいので、同じように手作り「俳句セレクト 20」を作って楽しむ。
- ・先生の和歌朗詠に興味を持ち、児童たちも朗詠をする。

(3) 特に、この和歌朗詠については音読・群読と重ねて、これからの入門期の古典学習として新たな可能性があることに気づき、それを全国大学国語教育学会で発表した。和歌朗詠に際して、五七五七七に無意識のうちに空白を入れることで、本来は長さの違う五音と七音同じ長さで朗詠する。別宮貞徳(『日本語のリズム 四拍子文化論』講談社新書、1997)は四拍子文化として次のようにいう。

日本語は、どの音(音節)もほぼ同じ長さ(時間)で発音されるのである。これを等時性という。「ヤ」も「ク」も「モ」もすべて同じ。あたりまえのように思うかもしれないが、普通のヨーロッパ語ではぜんぜんそんなことはない。(中略)そこで「八雲立つ……」について考えると、たんに字数を取るかぎり、五音句と七音句の時間の比は、等時性の原理によって五対七になるはずだ。しかし、実際には、先ほど述べたような間が入っている。

はる | すぎ | て |

なつ | きに | けら | し  
しろ | たへ | の |  
ころ | も | ほす | てふ  
あま | のか | ぐや | ま

「」の部分伸ばすことで、「二音一拍四拍子」で朗詠している。そしてこれは、和歌の朗詠に限らず、七五調の韻文にも共通する。具体的には「いろは歌」「祇園精舎」などがそれである。

いろ | は | にほ | へど  
ちり | ぬる | を |  
わが | よ | たれ | そ  
つね | なら | む |  
うみ | の | おく | やま  
けふ | こえ | て |  
あさ | き | ゆめ | みじ  
ゑひ | も | せず |

このリズムを簡単にいえば「トン・トン/ツー」となる。このようにリズムに乗せることで、身体をつかった楽しいものになり、知らず知らずのうちに歌を覚える。それは丁度難しい元素記号を覚えるのに、替え歌を使うのに近い。違うのは、そのリズムが日本語の韻文の中で磨かれてきたものだということである。これを契機に、リズムや朗詠から始まる古典入門が可能になるのではないかと考えている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

菊川恵三・中井萌「手作り百人一首カルタ「セレクト 20」の実践研究 ふじと台小学校・石垣中学の実験授業から」(『和歌山大学教育学部 教育実践総合センター 紀要』24号 2014.9 P161-167 査読無)

菊川恵三「「(言語についての)知識・理解」について」(『日本語学』臨時増刊号33巻5号 2014.4 p156-163 査読無)

〔学会発表〕(計1件)

菊川恵三「百人一首カルタを用いた古典教育 音読・朗詠・群読」(全国大学国語教育学会 筑波大 2014.11)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

菊川恵三(KIKUKAWA keizo)  
和歌山大学・教育学部・教授  
研究者番号: 00204826